風の通り路
山梨県北杜市小淵沢町１０１２２
0551(36)3826　ペンション風路

白いモンスターの森を行く
八甲田山スノーシュー

今年は八ヶ岳南麓も雪の多い冬でした。積もっても30㎝位で豪雪地帯の方には申し訳ないくらいですが、降る回数はここ数年では一番多かったと思います。3月下旬になっても庭が何度か真っ白になりました。

さてＪＲ東日本の「大人の休日倶楽部」の４日間乗り放題パス（１万５千円位）の威力を知ってから、その期間に旅行することが多くなりました。今年の１月は青森まで行って、できれば八甲田でスノーシューをしてみようと計画しました。

1月18日　1月17日大宮駅から東北新幹線「はやて」に乗り込みました。３時間ほどで新青森。スーパー白鳥に乗り換え、青森駅へ着いた時は雪が舞っていました。20数年前に青森駅に来たことがある周平は、駅前の変貌に「あれッ！駅前にこんなビルなんかなかったよ！港が直ぐ近くで干物やワラで縛って吊してあるしみ豆腐、魚介類を売っている露天が並んでいたんだけど・・」と仰天。

「この近くに海鮮食堂があるはず」とインターネットで調べておいた食事処を探します。駅前を少し歩くと目指すビル。地下に降りればすぐにわかりました。「あまり時間がないんですが」と店員さんに言うと。「『海鮮丼』なら、大丈夫だと思います」との答。ほどなく運ばれてきたのは大間の鮪のトロとウニがどかっと乗った丼。とろけるような味は絶品でした。

迎えのバスに乗り10分ほど市街地を走るとだんだん山の中へ。ガスが濃くなってきて、窓の曇りを手でふいた穴から見える外の景色は真っ白。約1時間ほどで大きな「酸ヶ湯」の看板の掛かった温泉に着きました。旅館に入ると受付のホール、その脇には名物の「ヒバ千人風呂」の浴場入り口、ホールの壁には八甲田一帯の写真が飾られています。受付を済ませて部屋に案内され、さっそく「千人風呂」に挑戦です。ここは「混浴」！後で分かったのですが、浴着も売っていて、それを着て人っている女性もいました。

脱衣所は男女別々でしたが中は一緒。入口から湯船までは衝立があり、お湯も白濁でお湯に浸かってしまえば、OK（?）湯気がもうもうで、ボヤッと人影がわかるくらいです。ゆっくりお湯に浸かりました。あ～いい湯だな。他に男女別の浴室もありました。

さてスノーシューです。フロントで聞いたところ、「ロープウェー会社がスノーシュートレッキングを開催している」とのこと。もちろんそれに参加です。翌朝、午前8時半に旅館のバスに乗車。20名位の乗客のうち何人かはスキーツアーの人たちのようでした。申し込みを済ませて、ロープウェーに乗り込みました。山麓駅は雲間から陽も差してくる天気でしたが、登っていくとすぐにガスでほとんど展望がなくなってきました。ロープウェーは１００人乗りの大きなもので、山麓駅から標高１３２０ｍの山頂駅まで標高差６５０ｍを一気に登っていきます。駅に着いて外に出ると風が身を切るようで、慌てて駅舎内に逃げ込みました。ガイドの人達の簡単なレクチャーを聞き、スノーシューを装着

うらへつづく

渡嘉敷裕さんの歩く植物図鑑

No.25 クサボケ

庭や公園で見る「ボケ」は枝が太く長く伸び、しっかりしていて、見るからに大木である。それに対してクサボケは低木で枝がやや細く、姿容はなんとなく優しい。和名に「クサ」を冠するのはこの姿による。

「草ボケ」といっても、根はなかなかのもので、枝をすっかり刈られてしまっても頑強に生き続ける。里山など毎年のように繰り返される下草刈りにあっても、地下部は生き延び、やがて再生して草丈低く花をつける。

花は鮮烈な朱紅色で目立ち、山野に春を告げる。あるいは遠い故郷の原風景に色濃く残る、そんな花だ。でも所によっては花がどぎついと言って嫌われものになっている。かつて、クサボケを「地梨（じなし）」と呼んでいた信州の平賀では「ジナシはジャンボンバナともいいやす。ジャンボンは葬式でごわすに。この赤い花はくどすぎて不吉な感じがするせいか、持ってくるとその家の人が死ぬとか、火事になるとかいいやす」と言って忌み嫌われていた。

実はアンズ大のゆがんだ球形で洋梨に似ており、信州の方言「地梨（じなし）」はこの形容による。なかなかふさわしい名である。ところが、かつて信州には「ジナシ屋敷に植えると地所なくす」といって敬遠する風習があった。これはどうやら考え過ぎであろう。クサボケはそんな悪者ではない。実はカリンそっくりの甘い香りを漂わせ、いかにも美味しそうで思わず手にとる。だが生ではえらく酸っぱく、塩漬けや焼酎漬けにして食べる。

香りがカリンにそっくりなのは、それもそのはず、もとよりカリンとクサボケは同じ仲間、つまり同じ属である。

ボケ属は僅か5種で、日本固有のクサボケと中国原産のボケとカリン3種の関連を考えると、植物分類学、植物分布地理学から見て実に興味深い。クサボケとボケは葉の形や花の形、それに枝ぶりなどがよく似て近縁である。これに対して、カリンは幹が太く樹高10ｍにも達する高木で違いが歴然としている。ボケ属について地史的時間を遡って考察すると、以前には3種を連結していた幾つかの種が東アジアに広く存在したのではないかという考えが浮かぶ。とりわけ、ボケとクサボケの隔離分布から見ると、以前はこの両種の間をつなぐ種が存在していたことが考えられる。この幻の種は、あるいは東支那海の誕生に伴って絶滅したのかも知れない。

クサボケは本州と九州の山野に分布し、ごく普通に見られる植物で、何の変哲もなさそうにも見えるけれども、長く来た道を想うと、植物学から見て貴重な存在である。

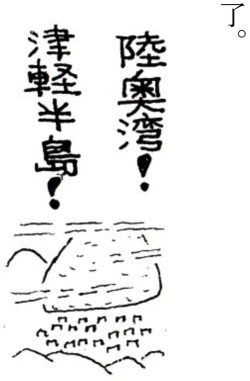
表からつづくし出発です。

「いやあ、今日はいいほうです。昨日なんかは建物の外に出ることも出来ないくらい風が吹きつけていました。」と笑う雪焼けしたガイドの方々。少し行くと大きなパラボラアンテナの脇を抜けて雪で覆われた木々の中に入りました。

「この雪の森はアオモリトドマツの樹氷でモンスターと呼ばれています。シベリアから強い風によって運ばれてきた雲粒がアオモリトドマツに衝突した瞬間に氷結してできた物で、木に雪が積もったものではありません。『エビのシッポ』と呼ばれる木の枝や岩肌にできる羽毛状の氷の塊も同様で風上に向かって成長していくので、尖った先の方が風上になります」との説明。

森の中は冷たい風が遮られて少しほっとします。しばらく進むと、下・前方が開けた地点に出ました。「この下方に広がっているのは田茂萢（たもやち）湿原です。今は雪に埋まっていますが、雪のない時は大小の沼と植物の群生が見られます。その向こうに田茂萢岳、さらに大岳が臨めます」

「きょうは行きませんが、この先が田茂萢岳です。ここからの眺望は素晴らしく、雪のない季節にも是非尋ねてみて下さい」、ガイドさんの説明に大きく頷く私達。一瞬、ガスが晴れて湿原の全容がおぼろげに見えましたが、すぐにまた真っ白。「寒いのでここらあたりで引き返しましょう」とのガイドさんの声に内心「ほッ」。下ってきた分登り返します。再びモンスターの森に入り、約1時間弱のスノーシュートレッキングは終了。

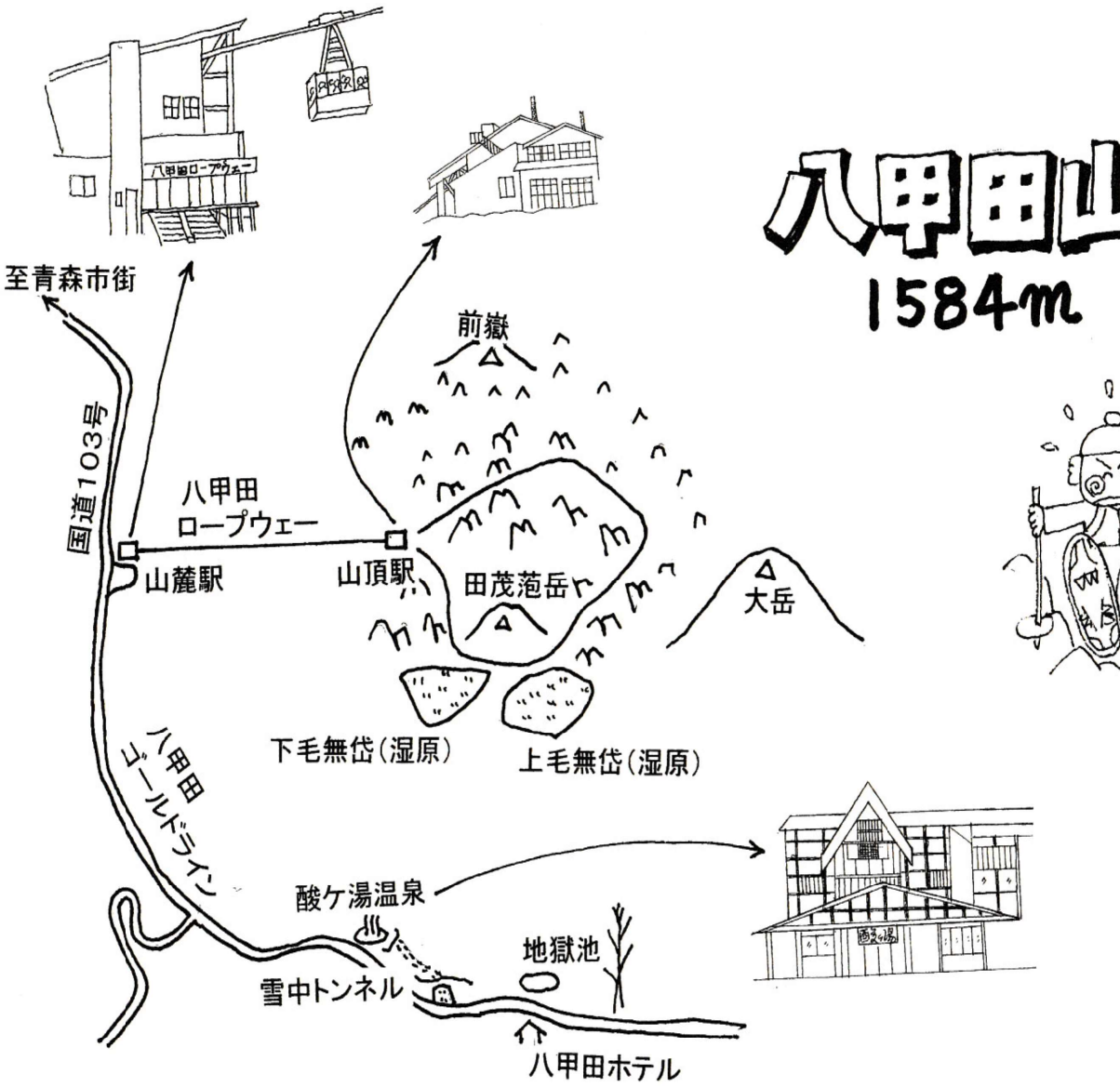


「しばらくスノーシューを借りていてもいい」とのこと。駅2階のレストランで食事をしてから「少し散策してみよう」と少々寒さにめげている周平を説得。これが大正解！食後、ガスが晴れてきて周囲の眺望が少し見渡せるようになってきたのです。冷たい風もやんできました。いいぞ！午前中のトレッキングで案内された道を行き、森を抜けるところまで来ました。午前中はガスでまったく見えなかった後か下方の湿原、その向こうの山々、その斜面を覆い尽くすモンスターの森が果てしなく見渡せました。時折薄日も射してきて午前中とは全く別の世界が広がっています。振り返ると青森市街の街並み、その向こうに陸奥湾、左手には岩木山と津軽半島、陸奥湾の向こうには下北半島が霞んで見えました。「いや～すごいッ！」、眼下に広がる壮大な景観を堪能しました。

酸ヶ湯に戻り、もうすっかりベテランの？ヒバ千人風呂へ。

翌朝、晴れ上がったいい天気。午前11時のバスまで、近くを散策しようと受付で周辺の散策コースを尋ねると、「除雪されている車道を行くしかありませんね」と言われ、八甲田ホテルへ続く車道を歩いてみることにしました。3m位の雪の壁ができています。10分程行くと雪の壁を階段状に切り開いてその上に出られるようになっていたので、そこを登ってみました。

なんと！八甲田山の主峰・大岳が一際高く真っ白に光っています！空は真っ青。ところどころに白く雪化粧したダケカンバやヤマザクラが青空に映えてとても綺麗です。直ぐ真下には地獄池。この池は凍っておらず青い池面が静かに光っていました。「地獄池は火口湖で、今も90度での熱い温泉が池の底から湧きだしているので凍らない」とのこと。言われてみれば池の端から湯気が立ちのぼっていました。素晴らしい散策にすっかり満足。帰る途中で雪の壁に人1人がやっと通れるくらいの穴。中に入ってみると、狭い雪のトンネルが50mほど続き、その先は酸ヶ湯旅館の裏口でした！。

青森駅に着くと来た時に寄った海鮮市場に直行。テーブルにつくや「にぎりをお願いします」と注文しました。パクパク頬張っていると店員の方が「一昨日来て下さった方ですよね。これはお店からサービスです」と貝柱のにぎりを持ってきてくれました。甘くとろけるようでいて、しっかりとした弾力のある鮨でした。ごちそうさまッ！

お鮨を堪能した後は隣の市場を回ってお土産の海産物を購入。帰りの新幹線の中で、ぜひ雪のない季節にも来てみたい！と夢見る私たちでした。